

第六回宮古島文学賞 選考評

椎名 誠

宮古島の文化協会が主催し、毎年島にからまるテーマで募集している非常にユニークな注目すべきこの文学賞は、年々その知名度を増して、全国各地からの応募作に触れることができる。本年度は特に島を長年の慣習や価値観をもって語っていく作品が多く集まり、充実感と重みを持ってきたように思う。

けれど島の文学というと今回などは特に死生観に基づくテーマが多いのにやや困惑した。最終選考作八編中、過半数が人の死やそれにまつわる恩讐を含めた島独特の物語になっている。文学に死生観は強みを持つテーマだが、果たしてこのように集中的に応募作品にこのテーマが並んでくるとどうなのだろうか。それらの中にはあまりにもその思いが強すぎて何やらおどろおどろしい世界に物語が展開していくケースもあって、いささか考えさせられた。

その考えさせられたという意味は、思索を深めたという意味ではなく、これらのテーマがこの文学賞の根幹になっていくとしたらどうなのだろう、という突き止められない今後への不安である。

限られた選評枚数なので本題に入る。

「檻の魚」が個人的には高得点となった。物語世界が無理なく表出している。ただし、主人公の家庭と家族のキャラクターがいささか類型的で抱える問題点も現代社会では凡庸。それぞれの人物描写がもつと欲しいところだった。その中でも祖父と主人公である少年とのつながりが唯一のストーリーラインで、クライマックスから一転して明日への第一歩が心地よかった。

文学には耳目をひきつけるテーマ、主題、イントロの世界観などが力を呼ぶが、「カルロタコ、食べますか？」はその意味で出だし良好、話の設定および登場人物に期待を持ったが、離島を巡るゼネコン開発問題など、いさ

さか類型的だった。

「凱風」は最後まで評価が競われた。全候補作品群の中では文章に軽々としたリズム感があり、物語の展開に興味の広がりを感じるが、しかしこれとて類型的。古めかしいセンチメンタルジャーニーでとどまってしまったのが残念と思った。全作品の中でもっとも軽やかな風を吹かせた作風だったが、タイトルの「凱風」の不必要な重々しさに阻まれた気がする。

以上の作品に数点が加えられた最終選考であつたが、行き詰まったその先でいきなり存在感を大きくしてきたのが「ソラピートの夢」だった。やまとの者には馴染みのない海洋史劇のスケールと、島の因習を含めた幾多の難テーマも、南の烈風に巻き込まれた感覚があり、タイトルの語るソラピートの夢に文学の広さを大きく感じた。小さな島に巨大な海洋史劇、心地のいい展開を見せた選考会でありました。